

棚田学会通信

第25号 2008年6月25日

発行/棚田学会

〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときゃらばん内)

TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



「棚田の夜明け」十日町市星峠の棚田 (撮影：武井 龍彦)

◆巻頭言	2
米どころ越後妻有(十日町市)の棚田	新潟県十日町市市長 田口 直人
◆会員通信	3
神奈川県葉山町上山口の棚田	神奈川県葉山町在住 大串 定典
岩手と雲南省の棚田	NPO法人沙漠植林ボランティア協会 菊地 豊
棚田学会写真部(じょんのび会)の紹介	東京都府中市在住 今井 英輔
◆日本の棚田百選紹介	6
菅(すげ)棚田(迫田)の始まり(熊本県上益城郡山都町)	菅地域振興会会長 渡辺 正弘
◆書籍紹介	7
「高原サミット」:市川貴大著	兵庫県洲本農林振興事務所 矢崎 雅則

事務局ニュース

- 平成20年度棚田学会大会のご案内
- 若手研究発表会のご案内
- ベトナムの棚田見学旅行のお知らせ
- 編集後記

巻頭言

米どころ越後妻有
(十日町市)の棚田
『棚田』を通して『食』のあり方に
ついて考えましょう
新潟県十日町市市長 田口 直人

十日町市は、新潟県南部の長野県との県境、千曲川が信濃川と名前を変えて間もないところに位置します。東京からは約200km、新潟市からは約100kmの地点にあります。市の東側には魚沼丘陵、西側には東頸城丘陵の山々が連なっております。中央部に日本一の大河、信濃川が南北に流れ、十日町盆地とともに雄大な河岸段丘が形成されております。また西側の中山間地域には渋海川が南北に流れ、流域には集落が点在し、棚田が広がり農山村の景観を呈しております。

平成17年4月1日に、旧十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町の5市町村が新設合併し、新十日町市が誕生いたしました。

市の中央には農業法人等が設立され、えのき栽培を柱にした施設型農業や規模の大きな稲作経営等が展開されていますが、中山間地域では稲作を柱にしながらも花、園芸、山菜等との複合営農が取り組まれています。しかし、後継者不足、高齢化等が進む中で農業の担い手不足が深刻化しており、今後の地域農業の継続に大きな課題を抱えております。

また、当市は、農林水産省の中山間地域等直接支払交付金対象面積が約2,840ha(平成19年度末)と新潟県内でも一、二を争う棚田面積を有しております。平地が少なく、山と谷の組み合わせで成り立つ地形の中で耕地として拓きやすい土地は山間か谷間の傾斜地でした。

当市の水田管理の特徴として、春を待たずに、水稲の収穫後、降雪前までに耕起、代掻きをし、水をため込みます。秋には、当地は霧が発生しやすく、朝日が水田に反射して幻想的な風景が醸し出されます。棚田のある地域は、市内でも特に雪深い地域です。この地一帯に降る雪は厳しい暮らしを余儀なくする一方で、春には清冽な水となって山肌を流れ、土の養分をたっぷりと含みながら、耕地を豊かに潤していきます。

魚沼産コシヒカリの味わいは、雪国の気候風土か

ら生まれ、人々の手によってはぐくまれたおいしさなのです。

当地域の自然景観はまさに日本の原風景というにふさわしい、里山の景観が随所に残されております。当市は、美しい里山・棚田が多く、市内30地区で「新潟県の棚田のある風景」の認定を受けています。その中でも、日本の棚田百選に認定された松之山地域の「狐塚の棚田」をはじめ、松代地域の「星峠の棚田」や「蒲生の棚田」、そして、季節限定版の「儀明の桜の棚田」などには全国からたくさんのカメラマン、観賞者がその風景に魅せられて訪れております。

平成11年度からは、隣接する上越市と「越後田舎体験推進協議会」を立ち上げ、都会の中学校等の修学旅行を受け入れる「越後田舎体験」事業が開始されました。都会の子供たちが棚田で田植えを行い、地元の農家に民泊し、農家とのふれあい農村生活を体験することで、生きる力を身につけようというこの取り組みは、都会の学校に大変好評で平成19年度には49団体、4,351人の子どもたちが圏域に訪れています。

さらに、松代地域においては早稲田大学との約30年来の交流の中から、平成18年度より「農業体験」を大学の授業として当地の棚田で春、秋2回開催し、棚田をメインにした講演会等は公開授業として行われ、地域の住民も受講しております。

しかしながら、農家の高齢化が進み、担い手不足が深刻化する中で、棚田を保全し、集落の農業を継続することは容易なことではありません。

当市では、集落営農体制づくりを進める中で、棚田を保全する会を組織し、交流している都会の諸団体や都市住民とも協働しながら日本の原風景棚田の里を守って行きたいと考えております。

平成21年に当市で開催されます第15回全国棚田(千枚田)サミットは、新潟県では第2回目の開催となります。全国棚田(千枚田)連絡協議会の会員の皆様をはじめ、全国の中山間地域で棚田保全に力を注いでおられる方々に対し、あらためて敬意を表すると同時に本サミットが「食」と「環境」を見つめなおす良い機会となりますよう、関係する組織体制を整え、精一杯取り組みを進めてゆく所存であります。

皆様と棚田を介しての一大交流ができますよう、開催に向けて尚一層のご協力とご指導のほど、よろしく願いいたします。

会員通信

神奈川県葉山町上山口の棚田

神奈川県葉山町在住 大串 定典

神奈川県三浦半島には棚田或いは棚田の跡が多く見られ、横須賀市にも逗子市にもそれがあります。中でも葉山町には六ヶ所の集落のその何れにも棚田の跡があります。その中でも最大の上山口の杉山神社周辺の棚田は今もお立派に管理され、大小64枚の水田棚田は、御用邸のある町葉山の棚田として誇りをもって管理されています。

それには昔から棚田の上方から下方へと両側にある小川が大きく役立っています。80年くらい前は、田の枚数も多かったのですが、道路や住宅が出来、その数も少なくなりました。しかし、上方の湧水を集めての80tタンクが建設されて、雑廃水の入らない水が活用されており、8年前には神饌田に指定されるなど、献上された米づくりの場として忘れることのできない棚田であります。

遡って小学生のころ、85年前になりますが、近所の小父さんが毎日のように鍬とツルハシを使って棚田づくりをしておられた姿を思い出します。昔からの棚田の横に約80m²ほど掘るために、小石をとり除きながらの作業は大変なことだったと思いますが、今は荒廃してしまっています。あちらこちらの棚田がいつごろどのようにして造られたのか知りたいことの一つです。

私も農家に生まれて育ったものですが、不況で厳しいときに小学校を卒業し、運よく横須賀海軍工廠教習所に合格したので殆ど農作業をすることはなく、田植のときに苗運びをするくらいで、田づくり、田植え、稲刈りなどの水田作業をしたことはなかったのです。

今の田づくりは機械化され、苗づくりは箱まきで庭先き管理、田植えも機械植えと迅速化されました。手植えといえば機械の入らない小田か、田の隅々だけで、田植えの共同作業もその仕組みも大きく変化しています。

30数年前の昭和49年に施行された水田再編対策事業によってあちらこちらで転作が進められましたが、残念ながらそれが荒廃しつつあります。

葉山町上山口の棚田は7人の所有者を中心に美しく管理されています。高齢化の進行は避けられない

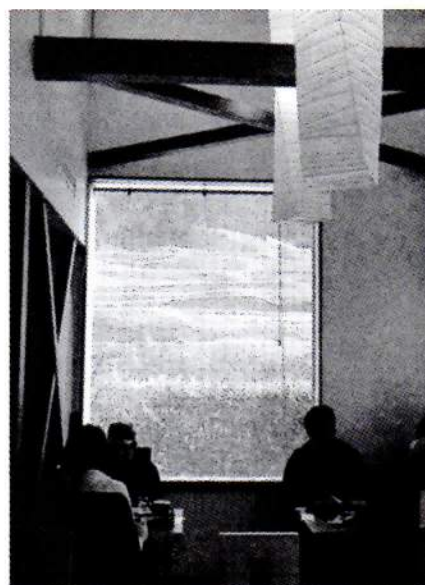
ながらも、援農組織としての里山会グループによって支えられておりますが、美事な棚田の保全には更に大きく関心を寄せる必要があると思います。

輪島の千枚田、千葉県鴨川の千枚田を見学することや、又棚田学会誌から各地の棚田について色々と学ばされていますが、その歴史を知りたい気持ちを今もなお大きくしています。

日本国内のみならず諸外国の棚田の歴史を学ばせて頂けたら幸甚です。



逗子と横須賀を繋ぐ道路の上方に広がっている上山口の棚田。



棚田の真ん中にあるお蕎麦屋さん「和か菜」。蕎麦通をもうならせる味と評判が高い。

岩手と雲南省の棚田

NPO 法人 沙漠植林ボランティア協会

菊地 豊

私は岩手県山村農民で、第二次世界大戦の米不足時代に自家用米まで強制買上げされたことをバネにして同志と共に2万5千俵販売の衣川村を7万俵販売の村に変えたとウヌボシしていた。が、1989年、中国雲南省の苗族のコメ作り現場を見て驚いた。ここでは、棚田が300年間も不耕起、無肥料で耕作が続けられていたのである。

山の上部は急斜面が水源森林、中腹部を狭い棚田にして340日間湛水して、水稲、鯉を自給自足している苗族の知恵は無敵である。天然林の枯枝と上手な間伐で薪木、木炭に利用。住宅用材を切れば必ず植樹して水源涵養機能を100%発揮させている。

沢の湧水は、小池で飲水と洗濯水。中池で魚飼いのあと巾5米×長さ30米の棚田に引き、湛水し、段差10cmの田に次、次に湛水して300m位でUターンさせて戻ってくると高さ2~3mの棚田になるという具合で、これが50段以上に繰り返されて一滴のムダもなく利活用されている。そして、常時鯉を飼い、稲刈落水期は集魚くぼ地もある。

平地を漢族に占められた少数民族の知恵は、稲刈後のワラは縄などの生活資材に使う外は全て田に戻し、湛水中に微生物に分解させて有機肥料にし、刈株は足で踏みこみ、耕起に近い状態(=不耕起水田)になっている。少量の水で広大な棚田を持続させている「生きている世界文化遺産」である。

しかし、欠点もある。急な坂道、小区画で人と水牛だけの重労働、反収は200kg前後であるが、資源浪費のない、持続可能な食料生産システムであることはマチガイない。課題は、軽労働化するなか中區画化などであろう。

私はこの雲南をヒントにして、不耕起、冬水たんぼづくりを始めた(現代農業誌発表1991年3月号)が、猛烈な雑草に負け(当時の除草技術は未熟)、現在は休止している。

私は、1990年から中国沙漠地帯(内蒙古自治区ホルチン沙漠など)で黄砂防止植林を始め、5年間の試行錯誤を繰り返して、ようやく3万haの緑化に成功し、防風林に囲まれた沙漠水田でコメ作りを支援している。現地農民と協働して砂地を平整し、ビニールを敷き、作土を40cm客土して灌水すると、収量は反収500~700kgで、地下水吸上げ量は1/4であった。農民はコメ自給のみならず販売量を増やすことが可能になり、収入が増え、トラクター農業が急増している。

2005年、ホルチン沙漠などでの植林成功を聞いた雲南省(雨が多いのに天然森林が乱伐、山牛放牧で砂漠化急増中)の招きで踏査し、隣の貴州省と同じ棚田が水源枯渇の現状を知り、試験植林を始めた。見通しはできたが資金不足で中断している。地方政府流の用材林=針葉樹植林をやめ、落葉樹ポット苗+植穴客土は予想以上に成長し、放牧禁止で野花蜜源も増えて養蜂キャンプが新設された。日本製のバックホーを使えば狭い棚田でも簡単に広く改造できるので、客土植林と併せて施業することで問題は解決できる。現在資金協力者を求めている。

2008年、自己所有林を環境林に変える参考例を調査中に、昭和初期の農村不況で棚畑に植林した杉林の間伐現場をみた。元畑の上部山腹は美事な天然林になり、沢水も豊富になっていた。ここでもバックホー開田をすれば簡単に3反歩区画の棚田が20枚はできるとみた。現在林業不振で放置されている日本の山林を観察すると、まだまだ国内には新開田の可能地はいたる所にある。

今、世界的な食料不足が予想される。外国からの食料輸入に甘んじている日本の将来は危いと思うが、棚田の知恵を活用すれば持続可能な食の自給は可能であるだけでなく、今まで述べてきた技術を世界に普及すれば、温暖化も食料不安も解決できると思う。

棚田学会が、都会人の自然志向、情緒的棚田活動に甘んずることなく、先見的感覚で21世紀新文明創造の一翼を担ってほしいと待望します。

日本など政府官僚の欠点であるナワ張り根性、例えば、林野庁の短期木材収益のための商業林経営、農業関係庁の土建業のための水田区画拡大やオイシイと錯覚する特殊米販売で流通業者を支援する策などを改めて、農民と市民の協働によって100年計画で自然との調和のとれた日本、世界を創る先進例を創って下さい。(2008年4月20日記)



左側は、乱伐、山羊放牧で沙漠化した山に農民家族と植林。右側は、天然林皆伐、放牧で沙漠化、水源枯渇し、水田→畑が増えている。(2007年2月22日雲南省羅平県)

棚田学会写真部 (じよんのび会) の紹介

東京都府中市在住 今井 英輔

棚田学会写真部の発足の経過説明をいたします。

第11回棚田学会海外現地見学会「中国雲南省」が2005年5月にありました。帰国後、「元陽の感動をもういちど」ということで、互いの写真を持ち寄りました。その席で、この感動を形あるものにして残したい。こうして生まれたのが、写真集「雲南省元陽の棚田 棚田学会現地見学会報告」です。写真だけではなく、棚田学会の先生方の協力を得て、学術文章を収め、2006年4月に発刊されました。完売でした。

その後、2006年9月に、現地見学会「山古志村の棚田」が開催されました。その折、新潟県柏崎市高柳町の宿泊施設「じよんのび村」に写真好き・絵が好きな仲間が集合し、写真部が発足しました。

「棚田学会写真部」？ はてな？ はてな？

でも、通称「愚連隊」なら知っている方も多と思います。通称「愚連隊」は、私たちの品性にはどうも相応しくない(?)と思われまますので、「じよんのび会」と変更しました。

「じよんのび会」の謂われは、写真部が発足した「じよんのび村」に因んでいます。



白川郷にて (08年1月23日)

「じよんのび」とは・・・ゆったり、のんびり、芯から心地良い、という越後高柳の方言です。

「棚田に向かい、ゆったりと、のんびりと、気持ちよく写真を撮る・・・絵を描く」という趣旨で、名前を変更させて頂きました。

写真部部长は、棚田写真家の永田博義さんです。活動は、もちろん、きちんと年間計画を立てます。新年会から始まり、棚田学会・棚田サミットの行事等に合わせて、棚田巡り。棚田巡りの後は、お酒が主かもしれませんが・・・。写真を持ち寄り、反省会をします。

「何か棚田に役立つ活動をしたい!」「写真が、絵画が何か役立たないか?」「何か棚田学会に役立つ活動をしよう」「何か棚田サミットに役立つ活動をしよう」という声が湧き上がりました。

今後、メンバーと相談しながら、選り抜かれた棚田の写真・絵画を活用した企画を立て、実行したいと思います。具体的企画は後日、報告させて頂きます。

今後の「じよんのび会」にご支援下さい。また、ご注目下さい。

そうそう、棚田学会写真部企画ということで「ベトナムの棚田見学旅行」も計画しています。

棚田学会写真部の入部方法? 棚田学会事務局にご連絡ください。部費は0円です。



西伊豆にて (08年4月2日)

日本の棚田百選紹介

すげ

菅棚田(迫田)の始まり

—熊本県上益城郡山都町—

菅地域振興会長 渡辺 正弘

今から150年程前までは、菅地域は交通の便、水の便共に悪く、人々は深い谷間に点在して住んでいました。わずかな水田と山仕事のほかには生活の糧を得る術はなく、貧しい生活を強いられていました。

この苦しい生活から抜け出すためには、菅村奥地の鴨猪(かもしし)川上流から水を引き、菅地区一帯の山野を開墾する以外にはないと考えられていました。しかし、水源は2km以上も離れており、途中は切り立った岩ばかりで、水路を通すのは至難の業と考えられました。

村の役員たちは幾度となく話し合いを重ね、矢部手永会所や奉行所に水路の新設と山野の開墾を嘆願しました。また、矢部郷総庄屋布田太郎右衛門惟昭も農民の窮状を嘆き、この嘆願に献身的な努力を払いました。

文政7年(1824年)、晴れて奉行所の許可もあり、念願の大事業は始まりました。工事は当初から予想されたとおり切り立った岩との闘いの連続でした。1日に自分の弁当箱一杯の岩を掘る毎日であったと伝えられています。

農民の血のにじむような努力の末、全長5,700mの水路は完成しました。菅地区4つの集落の上を流れることから、人々はこの水路を「上井手(うわいで)」、また鴨猪=かもししから「羚羊井手(れいよういで)」と呼び、今日まで大切に守ってきました。この水路の完成で60haの水田が開かれましたが、これが矢部郷一の食味を誇る菅の棚田として、かつて山野のあった地に広がっています。

時が経ち、過疎・高齢化の進行と農業を取り巻く環境の変化は、先祖が守り育てた田をも荒廃させようとしています。平成8年、菅地域振興会は農地法特例による棚田オーナー制度に取り組みました。地域だけでは守りきれない農地を都市住民に耕作してもらい、農地の保全だけでなく都市、農村の交流を図ることで地域の元気を取り戻そうと考えたのです。この取組は13年目を迎え、現在15組のオーナーが

毎月農作業に通ってきます。

オーナー田の立地条件としては、①せまい田んぼ(1~2a) ②水利に恵まれていること、③道路の便利がよいこと、④小川が流れているなど子どもたちの遊ぶ場所があること、⑤近くにトイレがあること、などが挙げられますが、オーナーの皆さんも毎月1回菅に通い農作業体験のほか、地域の祭りや行事にも参加するなど交流が深まっています。

菅地域でも若い人達が少なくとも月に一度は家に帰り、家の手伝い、地域の手伝いをする事で、ふる里にも愛着が持てるようになってくると思います。

また、地域に残った者と若い人たちが共に努力を重ね、都市住民の力を借りながら魅力ある地域を創りあげていく必要があります。

私たちは、都市と農村の交流を通して山村の活力を取り戻したいと願ってやみません。



鴨猪川の羚羊井手(上井手)取水口



菅棚田(迫田)のオーナー田

書籍紹介

市川 貴大 著

「高原山麓サミット」

みんなで矢板市・塩谷町の地域資源を
発掘し、生かそう!!

矢崎 雅則 (兵庫県洲本農林振興事務所)

未完成の本である。と書くと、筆者に叱られそうだが、少なくとも完結はしていない。地域活力が低下しつつある中山間地域の振興を図る筆者の取り組みは、始まったばかりだからである。

著書の舞台は栃木県の北中部、高原山の南麓～東麓に位置する矢板市と塩谷町である。栃木県さえその位置がピンと来ない私には、「矢板市」と聞いてもさっぱり分からないが、日光の隣、東京から直線130kmほどのところにある。

さて、その両市町、高齢化・過疎化等によって地域産業の活力が徐々に低下しつつある典型的な中山間地域の自治体である。(断っておくが、このような自治体は全国に数多く存在する。) 両市町とも地域活性化が急務であり、地域資源の活用や住民間交流によって何とか活路を見出そうとした。その足がかりとして「高原山麓サミット」を開催したのだが、このサミットは、両市町の有志が実施した地域資源発掘のワークショップから発展したものだ。行政主導のイベントは、1回きりの「打ち上げ花火」になりがちで地域に根ざした活動として定着しないことも多いのだが、このサミットは、地元の企業や農家、農産物加工グループ、NPO、識者など幅広く参加しており、まさに地域密着、草の根的なイベントであり、様々な意見や考えが活発に交わされている。また、サミット参加者へのアンケート調査も興味深い。

冒頭にも書いたが、この本は完結していない。教科書的な本でもない。しかしながら筆者と同様、行政機関にあり、農業を通じた地域振興を勤めとしている私にとっては大いなる参考書である。また、行政関係者だけでなく、地域振興に取り組む団体、NPO、ボランティアの方々にも現在進行形の地域活性化の貴重な事例としてご一読いただきたい。この本の正しい活用方法は、筆者と共に考え、行動することであろう。

そして、是非とも筆者にご意見、アドバイスをお寄せいただきたい。外部の立場からの意見は、当事者では気づきにくい側面を教えてくれて、なかなか貴重なものである。

では早速、私から筆者に一言。

意味を知らない人間にとっては、何となくあったかい響きをするし、一度聞いたら忘れない言葉だし、結構良いと思いますよ、“でれすけ”!

でれすけの郷 “たかはら”

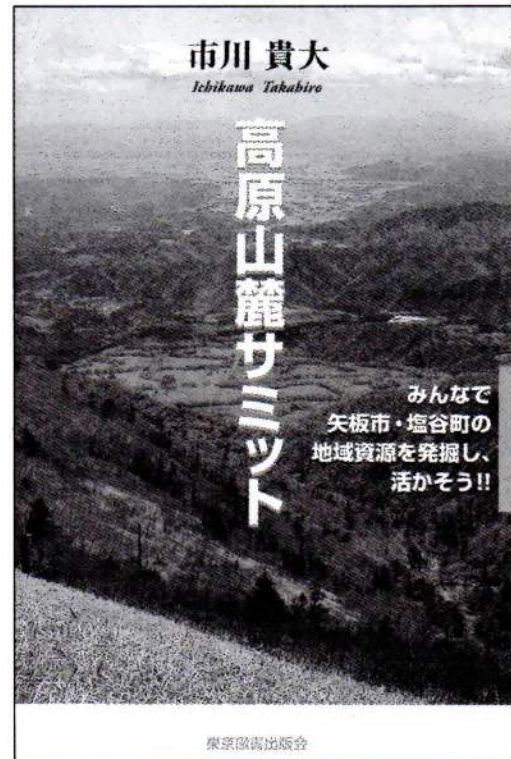
ここはかけがえない私たちのふるさとです。

「でれすけ」と言われてもいい。
私たちはゆっくりと着実に暮らしていきます。
「まだるっこしい」と言われてもいい。
時間はかかっても本物の味とサービスを提供いたします。

美味しく豊かな水、山の幸、農産物、温かい心、イヌブナの林と川。
ここにはのんびりゆったりした時間を過ごせる環境が整っています。

究極のスローライフを、ここで楽しみください。

でれすけの郷 “たかはら” のイメージ



発行：東京図書出版会

発売：リフレ出版

定価：本体 952 円＋税

事務局ニュース

平成 20 年度棚田学会大会

日程) 8月3日(日)

場所) 三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

- ◆平成 20 年度棚田学会総会 (12:45 ~ 13:45)
- ◆棚田学会賞授賞式 (14:00 ~ 14:45)
- ◆シボ・ジウム「棚田米はどうして美味しいか?」
(15:00 ~ 17:45)

◇報告

- 佐藤藤三郎
(棚田学会理事・農民作家/山形県上山市)
- 渡辺すみ子
(名月会副会長/長野県千曲市)
- 中山茂廣
(蔵野棚田保存会/佐賀県唐津市)
- 木戸幸子
(棚田ネットワーク理事/神奈川県横浜市)
- 成川亮治
(株)成川米穀代表取締役/神奈川県川崎市)
- 山岡和純
(棚田学会理事・東京大学大学院特任准教授)

◇パネルディスカッション

- コーディネーター
牛島正美
(棚田学会理事・全国町村会経済農林部部長)

- ◆懇親会 (18:00 ~ 20:00)
日本橋三越本店 7階 「不二の間」

第 17 回棚田学会談話会・若手研究発表会

日程) 10月4日(土) 13:00 ~ 18:00

場所) 早稲田大学 大久保キャンパス

第 1 部 若手研究発表会

岩治 新(東京農工大学大学院農学府修士科)
テーマ: 水田を中心とした農村景観の保全と
形成に関する研究

弘重 穰(東京農工大学大学院連合農学研究科)
テーマ: 外来者の参画による農山村地域の持続的
発展に向けた取組に関する研究(仮題)

永菅裕一(兵庫県立大学環境人間学研究科)
テーマ: 農村地域における棚田の保全と活用

伊藤 光(慶應義塾大学総合政策学部)

テーマ: 中山間地域における内発的な特産品
開発の契機と高価一福島県鮫川村を事例に一

[趣旨] 今回の若手研究発表会は、今まさに棚田を考
えるのに必要とされる「保全と活用」「内発的な活動」
を考えたいと思います。「棚田のサステナビリティ」
を皆さんと一緒に棚田からみとみることにしましょ
う。

第 2 部 談話会「佐渡の棚田について」

講師) 竹田和夫(新潟県立新潟南高等学校教諭)

ベトナムの棚田見学旅行のお知らせ

本紙でご紹介いたしました、棚田学会写真部「じよんのび
会」が「ベトナムの棚田見学旅行」を企画いたしました。

訪問先は、ハノイを除く、壮大な景色をもつ山岳地帯。独
特な生活習慣を持ち、今なお昔からの生活様式で暮らしてい
る少数民族の文化に出会う旅です。

奮ってご参加頂きますようご案内いたします。

棚田学会写真部 部長 永田博義

日程) 平成 20 年 9 月 20 日(土) ~ 9 月 27 日(土)

費用) 予価 230,000 円(その他諸税役 2 万円)

定員) 20 名(最少催行 10 名)

締切) 6 月 30 日(月)(第一次締切)

※連絡先等詳細は、案内チラシをご覧ください。



ベトナム サパタ景(撮影・青柳健二)

編集後記: 6 月 14 日朝、岩手・宮城内陸地震が起きました。折しも、奥州市役所職員である研究室の先輩を頼っ
て、学生グループがため池の生物調査に入っていたところでした。時々刻々ニュースが知らせる山間地での被害
の大きさは、予想をはるかに上回るものでした。棚田にも深刻な被害が及び、多くの方が犠牲になりました。心
からお悔やみ申し上げます。世界の食料危機、自然資源危機がにわかに現実化しつつある今日、自然との共生は
どれだけ厳しくとも取り組まなければならない、喫緊の課題であることをあらためて思います。(千賀)